

高校世界史教科書における西洋古代史(続)

安井 萌*

(令和5年2月1日受理)

要約

本稿は、新しい高校地歴科目「世界史探究」が間もなく本格的に開始するのを前に、現在使われている世界史B教科書の西洋古代史の記述内容をあらためて考察するものである。まず全体的枠組みにかかわる近年の変化として、帝国書院の教科書が地中海世界史の枠組みをより強調する構成となった点に注目する。ギリシア史の叙述に関しては、山川出版社のアテネ中心主義、ならびにポリス時代とヘレニズム時代の連続性を強調する姿勢に変化が見られる点、実教出版・帝国書院にジェンダーの話題が導入されている点などを指摘する。ローマ史の叙述に関しては、実教出版・帝国書院における初期キリスト教史の記述の変化、「古代末期」の時代概念の導入などを指摘する。

はじめに

周知のように、高校地歴科目の「世界史A」「世界史B」は、今年度入学者から順次必修の「歴史総合」、ならびに選択の「世界史探究」に置き換えられる。西洋古代史を専攻する筆者にとって、とりわけ新科目における当該分野の扱いがどうなるのか、気になるところである。この問題については、来年度以降「世界史探究」の授業が本格的に開始した段階で(今年度から始まった「歴史総合」では、原則として前近代史は扱われない)考察を試みたいと思う。だがその前にあらためて確認しておきたいのが、現在使われている世界史教科書——旧科目として最後の教科書——の内容である。筆者は以前(2009年)、主な世界史B教科書における西洋古代史関係の記述を分析したことがあるが¹⁾、現在の教科書の関連部分を旧稿で論じたものと比べると、さほど本質的な違いはないと言える一方で、若干異なる点、変化した点もある。小稿では、そうした新旧教科書の相違を中心に見ていくことで、旧稿の議論を補おうと思う。

旧稿で用いたのは計6社(三省堂、実教出版、第一学習社、帝国書院、東京書籍、山川出版社)の世界史B教科書であるが、このうち今も使われ

ているのは東京書籍『世界史B』と山川出版社『詳説世界史B』の2種である(以下、両教科書をそれぞれ東書、山川と略記する)。ただし、前者の内容にはこの約10年間ほとんど変化がないのに対し、後者には随所に修正が加えられている。一方、実教出版と帝国書院の世界史教科書は、その後新たに作り直されている。新版の書名は、実教出版は『世界史B』のままであり、帝国書院は『高等世界史B』から『新詳世界史B』に変わった(以下、実教、帝国と略記)。残る三省堂と第一学習社のものはすでに絶版となり、後継教科書も出されていないようである。以下の考察では、したがって東書、山川、実教、帝国の4種を対象とすることになる。

1. 全体的枠組み

本稿で「西洋古代史」と総称するところの古代ギリシア・ローマの歴史は、世界史教科書では「地中海世界の歴史」の枠組みにまとめられている。ここで言う地中海世界とは、地中海の自然条件に規定されつつ形成された文明圏と、ローマ帝国によって政治的に統合された統一体という二重の意味合いを兼ね備えた概念であり、どの教科書もこ

*岩手大学教育学部

うした意味の二重性がある程度踏まえた書き方をしている。ただ旧稿で指摘したように²⁾、これらのうちどちらに力点を置くかに関しては教科書により多少スタンスの違いがある。大方の教科書は「地中海世界」概念の説明として、地中海地域の自然的一体性を強調することで、前者の要素を前面に押し出しているように見える。これに対し東書は、ギリシアを東地中海世界、ローマを地中海世界の枠組みにそれぞれ分けて述べており、そのため地中海世界＝ローマ帝国とのイメージが強く喚起される。

こうした特徴は現在の4社の教科書にも継承されており、基本的な変化はないと言える。注目されるのは、帝国では、以下のように「地中海世界」の語が節の見出しに一貫した形で現れていることである。

第1章「オリエント世界と地中海世界の形成」

- 1 「オリエント世界の形成」 2 「地中海世界の形成とオリエントとの融合」 3 「ローマと地中海世界の成長」 4 「ローマ帝国周辺の西アジア」

同書の旧版の見出しは、

第2章「西アジア・地中海世界の成立」

- 1 「オリエントのあけぼの」 2 「オリエントの変動と世界帝国の出現」 3 「地中海世界の動き」 4 「世界帝国ローマ」 5 「イラン文明の継承と発展」

となっており、確かにギリシア史の節には「地中海世界」の語が見えるが、ローマ史の節には見えない。新版では、ギリシア史を「地中海世界の形成」、ローマ史を「地中海世界の発展」とすることにより、ギリシア・ローマの歴史全体を地中海世界の歴史として位置づける構成がより前面に出ていると言える。ちなみに、山川・実教では、以下のごとく、「地中海世界」が章の見出しには現れるものの、節には現れない。

山川 第1章「オリエントと地中海世界」

- 1 「古代オリエント世界」 2 「ギリシア世界」 3 「ローマ世界」

実教 第1章「西アジア世界と地中海世界」

- 1 「オリエント文明」 2 「オリエントの統一」 3 「ギリシア文明」 4 「ヘレニズム時代」 5 「ローマ帝国」 6 「イラン民族の国家」

これだと、あくまでギリシアの歴史はギリシアの歴史、ローマの歴史はローマの歴史との印象が強まり、地中海世界概念の存在感はやや弱まるのではないかと思われる。

帝国ではさらに、本文に「地中海世界」の語が明記(しかもゴシック体で)、説明されている点が、他の教科書(あるいは同書の旧版)には見られない特徴となっている(他の教科書でこの言葉はもう少しさりげなく用いられている)。やや長いが、該当部分を引用しよう。

「他方、地中海世界では、オリエントの影響を受けながらも、独自の文明が形成された。沿岸部と島々は地中海性気候に属し、夏は高温で乾燥するが、冬には一定の降雨がある。しかし山がちで平野が乏しい地形のうえに、古くから人が居住し森林を伐採したことが重なって土壌もやせている。そのため、麦のような穀物生産には向かず、オリーブやぶどうなどの果樹栽培が農業の中心であった。不足する穀物や鉱物資源を入手するため、人々は積極的に交易にのりだしたが、陸上交通が不便な地形だったので、地中海の海上交通が早くから発達した。この地中海世界では、オリエントのような強大な都市国家は成立せず、ギリシアのポリスに代表される独特な都市国家が数多く成立した。」(13-14頁、ゴシックは原文)

最後の世界史B教科書の一つである本書に、われわれは、地中海世界史の枠組みを最も強調する教科書を見出せると言えるかもしれない。

2. ギリシア史の叙述

次に、ギリシア史の叙述について見ていこう。まず、4種の教科書の関連する章の見出しを掲げる。

実教「ギリシア文明」:小見出し「エーゲ文明」

「ポリスの成立と発展」「アテネとスパルタ」「ペルシア戦争とアテネの繁栄」「ポリス世界の変容」「ギリシアの文化」

「ヘレニズム時代」：小見出し「アレクサンドロスの東方遠征」「ヘレニズム世界とその文化」

帝国「地中海世界の形成とオリエントとの融合」：小見出し「エーゲ文明」「ポリスの形成」「スパルタとアテネ（アテナイ）」「ペルシア戦争」「デロス同盟とペロポネソス同盟」「古代ギリシア文化」「アレクサンドロスの遠征」「ヘレニズム時代の文化」

東書「ギリシア世界」：小見出し「東地中海の海洋文明」「ポリスの成立」「アテネとスパルタ」「ペルシア戦争と民主政」「ペロポネソス戦争とポリスの変容」「ギリシアの古典文明」

「ヘレニズム世界」：小見出し「アレクサンドロス大王の東方遠征」「ギリシア系国家の分立」「ヘレニズム文明」

山川「ギリシア世界」：小見出し「地中海世界の風土と人々」「エーゲ文明」「ポリスの成立と発展」「市民と奴隷」「アテネとスパルタ」「民主政への歩み」「ペルシア戦争とアテネ民主政」「ポリスの変容」「ヘレニズム時代」「ギリシアの生活と文化」

ギリシアの歴史全体をポリスの「成立」「発展」「変容」の過程を基軸に描くという、旧来の基本的構図には、まったく変わりがない。帝国・山川がポスト・ポリス時代のヘレニズム時代も含めギリシア世界として一括するのに対し、実教・東書がこれをギリシア世界とは分けて記すという構成の違いも、以前と同様である。ただエーゲ文明に関しては、旧版ではこれをオリエント世界の中に位置づけ叙述していた実教が、新版で「ギリシア文明」の節に置き直したのが目に留まる。エーゲ文明を前ポリス時代としてギリシア文明から切り分ける教科書は、かつては2種存在したが（実教・第一学習社）、今はなくなったことになる。

興味深いのは、山川の見出しの変化である。まず、以前は「市民と奴隷」の見出しの下で記されていた内容が、「市民と奴隷」「アテネとスパルタ」の2つに分割された。単に分割されたというばかりでなく、とりわけスパルタに関する記述がかなり書き足され、より充実したものとなった。これにより、スパルタへの言及が奴隷制の話題の一環としてではなく、それ自体独立した位置を占めるようになった。旧稿で筆者は山川の「アテネ中心主義」を指摘したが³⁾、見出しの変化は、そうしたある種の「偏り」の修正を表わすものとして理解される。

もう一つ以前と変わった点は、「ポリスの変質とヘレニズム」の見出しが「ポリスの変容」「ヘレニズム時代」に分けられたところである。もしかすると、これは主として文章量の多い項目を分割し、読みやすくするための改変なのかもしれないが、しかし結果的にポリス時代とヘレニズム時代をより截然と分かつ印象をあたえる。こうした構成の変化に加えて、以前の山川のテキストには、ヘレニズム文化の説明であえて「個人主義」「世界市民主義」に言及しないという、他の教科書と一線を画す顕著な特徴が見られたが⁴⁾、現在の教科書には「この時代にはポリス中心の考え方にかわって、ポリスの枠にとらわれない生き方を理想とする世界市民主義（コスモポリタニズム）の思想が知識人のあいだにうまれた」（39頁、ゴシックは原文）との新たな文章が加えられた。そのため、ポリス時代とヘレニズム時代の連続性を強調する（山川の教科書に見える非常に個人的な）姿勢が、今はかなり弱まったように感じられた。なお、当該の見出しには、「ポリスの変質」が「ポリスの変容」に言い換えられるという変化も見られるが、これは「変質」の言葉が持つネガティブなニュアンスを避けるためと推測される。

ギリシア史の授業において民主政が重要なテーマとなることは、幅広い共通認識と言ってよいであろう。ただし、実際このテーマをどれだけ重点的に扱うかに関しては、教科書ごとに違いがある。ギリシア（アテネ）民主政の扱いに力点を置く最

右翼とも言うべき教科書は、(旧稿でも指摘した通り) 山川であり⁵⁾、同書のそうした態度は現在に至るまで一貫している。対照的に民主政の説明にやや素っ気なさが窺える東書の記述も、以前と同様である。ここでは、書き直された実教と帝国の両教科書において、関連の記述がどうなっているか確認しておこう。

「アテネでは、ペルシア戦争を通して、三段櫓船の漕ぎ手として活躍した下層市民の政治的発言力が高まり、前5世紀なかばごろ、政治家ペリクレスの指導のもとで民主政(デモクラティア)が完成した。すべての成人男性市民が参加できる民会が国政の最高機関となり、将軍などをのぞくほとんどの役職が市民のなかから抽選で選ばれ、裁判も多数の市民からなる民衆裁判所に委ねられた。こうした徹底した直接民主政を実現したアテネでは、成人男子市民の間での政治的平等が達成されたが、女性や奴隷、在留外国人は完全に政治から排除されていた。」(実教35-36頁、ゴシックは原文)

「アテネでは、土地などの資産をもたず、自費で武装できない平民(無産市民)が軍船(三段櫓船)のこぎ手として活躍したため、参政権を得ることとなり、ペリクレスの指導の下でより徹底した民主政が実現した。古代の民主政は国政の最高決定機関である民会に市民(成人男子)全員が参加する直接民主政であった。任期1年の執政官(アルコン)や法廷の陪審員は、全市民の中から抽選で選ばれ、無産市民でも職につけるように日当が支払われた。」(帝国23頁、ゴシックは原文)

実教について言えば、旧版と比べ含まれる情報にめばしい違いはないものの、説明がより丁寧になり、読みやすくなった印象を受ける。一方、帝国には記述内容の追加が見られる。旧版では、民主政の具体的内容として民会が述べられるだけであったのに対し、新版では、公職や法廷、抽選制、日当に関する一文が付されている。これはかなり大きな変化であると言ってよい。より注目

されるべきは、しかしむしろ上掲の引用に続く部分かもしれない。帝国では、「その後アテネは煽動政治家(デマゴゴス)にあやつられる衆愚政治におちいり弱体化した」(ゴシックは原文)との一文が続き、民主政の墮落(=アテネ国家の衰退)について語られる。これは同書の旧版と同じ叙述の仕方である。かたや実教は、旧版では「煽動政治家(デマゴゴス)による政治におちいって失敗を重ねた(衆愚政治)」(43頁)と述べられているのに対し、新版ではこの種の説明が姿を消している(「煽動政治家」「衆愚政治」といった言葉は現れない)。山川は以前よりこうした説明の仕方を避けているが⁶⁾、実教もまたその立場に転じたと言える。

新しく書かれた教科書である実教と帝国に共通する特徴として、ジェンダーにかかわるコラムが導入されている点を挙げられるだろう。アテネ民主政の説明にあたり、女性や奴隷は政治参加から排除されていたとの但し書きが付されるのは、どの教科書でも以前からの常套であったが、実教では、この部分にさらに「ポリスの男性と女性」と題するやや長めのコラムが加えられている(44頁)。そこでは、ポリスの男性市民と女性市民とは活動が明確に区別され、後者は公的な場から排除されたのみならず、社会生活においてもきびしく管理されたことが述べられている。帝国でも、直接民主政の説明の部分に「女性と奴隷にとっての民主政」と題する短いコラムが付されており(23頁)、「民主政から排除され」「父親が決めた夫と結婚し、子どもを生むという生き方以外は認められ」なかった、女性たちの差別的な境遇が述べられる。興味深いのは、実教の旧版には、アテネ民主政を扱った頁に「アテネの奴隷制」というコラムがあったが(41頁)、これがジェンダーに関するコラムによって言わば置き換えられたことである。また帝国の先述のコラムでは、女性ばかりではなく奴隷のことも述べられるが、分量的には前者に関する記述の方が多く、あくまでこちらの方が主との印象をあたえる。こうした奴隷制からジェンダーへという叙述の重点の移動は、時代的

な関心の変化を反映するものだと言えるだろう。

3. ローマ史の叙述

続いて、ローマ史の叙述を見ていく。まず、4種の教科書の関連する章の見出しを掲げよう。

実教「ローマ帝国」:小見出し「都市国家ローマ」「地中海世界の統一」「共和政から帝政へ」「『ローマの平和』」「キリスト教の誕生」「ローマ帝国の変容」「キリスト教の拡大」「古代末期の地中海世界」「ローマの文化」

帝国「ローマと地中海世界の成長」:小見出し「共和政ローマ」「ポエニ戦争とローマ社会の変質」「内乱の一世紀」「帝政ローマ」「キリスト教の成立」「ローマ帝国の再建と衰退」「ローマ帝国の国教となるキリスト教」「古代ローマ文化」

東書「都市国家から世界帝国へ」:小見出し「西地中海の諸民族」「ローマ共和政」「地中海世界の統一」「共和政国家の限界」「皇帝権力の成立」

「ローマ帝国の繁栄」:小見出し「ローマの平和」「ローマの文明」「都市と民衆」「地中海世界の諸宗教とキリスト教」「帝国の混乱」

「古代末期の社会と地中海世界の解体」:小見出し「ローマ帝国の変貌」「キリスト教の布教と聖なる世界」「ゲルマン人の大移動と帝国の分裂」

山川「ローマ世界」:小見出し「ローマ共和政」「地中海の征服とその影響」「内乱の1世紀」「ローマ帝国」「3世紀の危機」「西ローマ帝国の滅亡」「キリスト教の成立」「迫害から国教化へ」「ローマの生活と文化」

ローマ史の叙述は全体として、ローマ帝国の発展と変容、ならびに政治体制の変遷——共和政と帝政、また帝政前期（元首政）と帝政後期（専制君主政）——を軸になされおり、その基本的構図はやはり以前と変わりが無い。ただ、より細かく見ると、実教と帝国には旧版との大きな違いが2

点ほど見て取られる。1つは、初期キリスト教の歴史の記述である。旧版では両教科書ともに、それが単一の項目で扱われていた。すなわち、まず実教では、西ローマ帝国の滅亡まで政治史の叙述が一通り行われたのち、「キリスト教の成立と発展」の見出しの下、イエスの登場からキリスト教の迫害と公認、正統と異端の闘争に至る話が述べられる。帝国では、元首政と専制君主政の記述の間に、やはり同じ「キリスト教の成立と発展」という見出しの項目が差し込まれている。これに対し新版では、以上の話題がキリスト教の「成立」と「発展」の部分——実教では「キリスト教の誕生」「キリスト教の拡大」、帝国では「キリスト教の成立」「ローマ帝国の国教となるキリスト教」——に分けられ、それぞれ元首政期と専制君主政期の政治史の記述のあとに続いて述べられている。こうした構成は、すでに以前から東書で取られていたやり方であったが、今や4種の教科書のうち3種までが採用するようになったわけである。初期キリスト教の歴史を2つの部分に分けて記す意図としては、これをローマ帝国全体の歴史とより密接に関係づけながら学ばせようということだろうと思われる。

もう1つの違いは、「古代末期」という新たな時代概念が導入されている点である。実教では、帝政後期の記述の見出しとして、旧版の「専制君主制」に代わり「古代末期の地中海世界」が用いられており、この項目の最後に次のような欄外の注釈が付されている。

「ゲルマン人の諸王は、形式的にはコンスタンティノーブルの皇帝を尊重し続けた。そのため近年では、イスラームの進出まで地中海世界にはローマ的な社会が継続したことに注目し、地中海世界にキリスト教がひろまったことによる2～8世紀の社会の変化を重視した「古代末期」という見方も有力になっている。」
(48頁)

帝国では、見出しや本文にこの言葉は現れないが、「古代末期に心の支えとなったキリスト教」と題するコラムが別に置かれている。やや長いですが、引

用しよう。

「軍人皇帝時代の混乱の中で、伝統的な秩序がゆらぎ人間関係のきずなが弱まってくると、人々は個人の内面的な心の救済を求めるようになる。このような時代に現れたのが人里離れた荒野で禁欲的な厳しい修行にいそむキリスト教の苦行者たちであり、その代表が3世紀ごろに現れたエジプトのアントニウスであった。人々はこうした苦行者たちを「神の力」を地上において実現する聖者として崇敬した。このような聖なるものへの渴望が人々を結びつけ、キリスト教信仰を軸とした新たな秩序を生み出すことになるのである。」(33頁)

「古代末期」概念をいち早く教科書に持ち込んだのは、東書であった。本書の本文には、

「3世紀後半になると、キリスト教徒の間にエジプトの砂漠に住み苦行に励む者があらわれ、その噂がかけめぐり、苦行者を慕う者が群れをなすようになった。彼らは現生から逃避しようとしたのではなく、キリストの言葉への服従を追求したのであった。このような砂漠の僧窟は、エジプトから、シナイ半島へ、ヨルダンの谷へと広がり、4世紀はじめには修道院も開かれた。このような聖なる世界は、新しい禁欲思想を現実のものとしたのである。」(56頁、ゴシックは原文)

との文章があり、さらに次のような注釈が付されている。

「このような禁欲思想は、それまでの地中海世界にはみられないものであり、文明の基調が根本的に変化したことが推察される。このために、この変化をもたらした古代末期から中世初期を一つのまとまった時代としてとらえようとする歴史観が有力となっている。」

筆者が旧稿を記した段階で、こうした記述はかなり先進的で孤立していた。だが近年の学会動向を反映する形で、これが今や大半の教科書で採用されるようになったことは、注目に値する⁷⁾。ただし世界史教科書に「古代末期」の時代概念を導入

することには、特有の難しさもあるように思われる。現在の教科書記述では、かつての伝統的な古代・中世・近代の時代区分はすでに放棄され、「世界の一体化」の観点から、グローバル化開始以前の時代(いわゆる前近代)に関しては諸文明圏の形成・発展の過程として描くということが行われている。古代ギリシア・ローマの「地中海世界」も、そのような文明圏の一つとして位置づけられる。古代・中世・近代という言葉が教科書で使われなくなったわけではないが、それは現在世界史の叙述の枠組みとはなっていない⁸⁾。そうした中で、「古代末期」の概念や「古代から中世へ」のテーマといった形で、三時代区分を前面に押し出すことは、やや収まりの悪さを感じさせなくはない。

実教と帝国ではこの他、新しい教科書ならでは要素がコラムに見て取られる。実教の「古代ローマの女性」(44頁)や帝国の「ローマの家族のありかたの変化」(29頁)は、近年の家族史・女性史への関心を反映したものとと言えるだろう。また「共和政と民主政」(帝国27頁)や「ローマ法と現代社会」(実教49頁)は、ギリシアの政治体制を表わす概念「民主政」とローマの「共和政」とはどう違うのか、ローマ法が現代の法律にも影響をあたえたとはどういうことなのか、といった基本的な、そしてこれまでの教科書ではあまりきちんと説明がなされてこなかった事柄に解説を試みたものとして、注目される。

山川のローマ史の叙述にあまり大きな変更は見られないが、細部にはいくつか重要な修正が見られる。一例のみ挙げれば、「ローマ共和政」の記述が以下のように加筆修正されている。

「こうして参政権が与えられると、従来の貴族に一部の富裕な平民が加わって新しい支配階層が成立し、政権を独占するようになった。また実質的には元老院が指導権をもち続け、しかも非常時には独裁官(ディクタトル)が独裁権を行使できた。これらの点においてローマ共和政は、貧富の区別なく市民が政治に参加できたギリシアの民主政と大きく異なっていた。」(41頁、下線部は加筆された部

分)

貴族と平民の身分闘争の終結後、ローマでは新たな支配階層（ノビレスと呼ばれる）が台頭し統治するようになった。そうした、ローマ共和政史の流れを語る上でおそらく不可欠と考えられる話題が、付け加えられたのである（ただし本書に「ノビレス」の語は現れない⁹⁾）。山川に関しては、最後に、旧稿で述べた問題点をあらためてもう一度指摘しておきたい。本書では、元首政期の記述の見出しとして「ローマ帝国」が使われているが、これは「帝国」と「帝政」の概念を混同させる恐れがあるように思われる。地中海帝国「ローマ帝国」と政治体制の名称「ローマ帝政」とは、歴史概念として区別されなければならない。この場合、見出しには「帝国」ではなく「帝政」の言葉を掲げるのが適当であろう（ちなみに、実教・帝国の関連部分の見出しは、それぞれ「共和政から帝政へ」「帝政ローマ」となっている¹⁰⁾）。

おわりに

ここまで、高校世界史B教科書における西洋古代史の記述内容について、近年変化した部分を中心に見てきた。旧稿の分析から10余年の間に、叙述の全体的枠組みや基本的構成に本質的な変化はなかったと言えるが、局部的には大きく変わったところもある。とりわけ最近作り直された実教と帝国の両教科書には、随所に新たな特徴が見出された。当然の結論かもしれないが、比較的保守的な教科書の記述も、関係の研究動向を受け徐々に書きあらためられていくことが確認されたと言えよう。

さて、来年度からはよいよ高校で「世界史探究」の授業が本格的に開始する。この新科目の教科書には、おそらく旧世界史教科書から引き継がれる部分も多々あれば、すっかり刷新される部分もあるであろう。はたして「世界史探究」で用いられる教科書はどのようなものになるのか。またそもそも必修の「歴史総合」で扱われない西洋前近代史の教育はこれからどうなるのか。今後引き続き関心をもって注視していきたいと思う。

註

- 1) 安井萌「高校世界史教科書における西洋古代史—その叙述のあり方—」『岩手大学文化論叢』第7・8号（2009年）（以下、拙稿）。
- 2) 拙稿、58頁以下。
- 3) 拙稿、63頁。
- 4) 拙稿、66頁。
- 5) 拙稿、64頁以下。
- 6) 拙稿、66頁。
- 7) 「古代末期」の考え方を提唱したイギリス人史家P・ブラウンの著作は、すでに数種邦訳が刊行されている。
- 8) 拙稿、61頁。
- 9) 実教・帝国・東書には「ノビレス」の語が記載されている。
- 10) 拙稿、68頁。